

立花英裕先生追悼号

2021年夏、日本フランス語圏文学研究会を牽引して来られた立花英裕先生が逝去されました。本号では、立花先生に追悼の意を表し、先生とご縁のあったみなさんに立花先生との思い出や立花先生の業績について寄稿していただきました。

§ 1 立花先生の思い出



ストラスブールにて（撮影：村田）

小さな海に投げこまれた瓶

大辻都（京都芸術大学）

奥付の記者紹介には、「フランス文学専攻／早稲田大学法学部専任講師」とある。1990年1月発行の初版だが、読んだのはたぶんその数年後だ。ラテンアメリカ小説の独特な面白さに目覚め、フリオ・コルタサルの名を知ったのは1992年から93年ぐらいのはずだから。

じつに30年近くを経て読み返してみた小説は、初読としか思えないほど記憶がなく、同時にどこか懐かしい読後感があった。一方はっきり覚えているのは、そのさらに1、2年後に訳者のひとりと出会い、この小説の感想を語って意気投合したことである。日仏学院が主催するイベントの会場で、まだ大学院への入り方もわからなかった私は、スペイン語の小説を訳していながらフランス文学が専門だというその研究者をひたすら眩しく感じたものだが、もう何を語ったかも覚えていない私の感想——とりわけ当時の自分の習性からして妙に細部にわたった感想だったろう——をととても喜んでくれ、気さくに話に応じてくれたのだった。

『海に投げこまれた瓶』原書は、1982年に出版されたコルタサル最後の短編集だ。コルタサルといえば、「南部高速鉄道」や「奪われた家」など、日常が非日常に接続していくシュルレアリスムの作風で知られる作家である。本書でもまた、作家本人と思しき人物がイギリスの女優グレンダ・ジャクソン宛ての手紙を瓶に詰め、大海に放つイメージが鮮烈な表題作に始まり、美術館でとある部屋の連作を観た語り手が、いつの間にか現実の同じ部屋に踏み入れることになる「局面の終わり」、スペイン語の回文、atar a la rata（ネズミを罠に掛ける）に端を発し、ネズミに擬えられたゲリラ軍が追い詰められてゆく「サタルサ」、昼は厳格な学校の校舎が、真夜中には常軌を逸した遊戯の場と化す「夜の学校」、幼少時に憧れた友人の姉と文字の世界で再会し恋を成就させる「ずれた時間」などまで、コルタサルらしい題材とスタイルを堪能することができる。二次元と三次元、文字の世界と現実世界、規律と放埒、過去と現在……いずれも本来交わることのない世界同士が、作家による言葉の魔術で地続きとなる挑戦的な作品ばかりであり、再読後、久しぶりに触れる20世紀ならではの実験的文学の濃度に嘆息した。

日本語版は、鼓直との共訳。立花先生が全体を訳した後、鼓先生が訳文を整えたとのことだ。自分も関わるようになってわかるが、翻訳者とはどの読者にも増して原書と深くつき合う者である。日本語になった『海に投げこまれた瓶』の独特な世界は、当時の立花先生が一語一語吟味し、向き合った世界なのだとあらためて思う。

日仏学院での出会いから6、7年後、大学院の博士課程でフランス語圏カリブ海の作家研究をすることを選んだ私は、立花先生に再会する。誰と出会うときでもそうだが、出会いの瞬間には、その関係が長く続くのか、濃いものになるのか否か、わからないものである。同じ大学の師弟というわけでもないし、その後先生が鬼籍に入られるまで20年もの間、親しくさせていただけとは思わなかった。

エドゥアール・グリッサンを中心に、独力では到底歯が立たない原書を数人で読むことで、この地域の思想、文学を臆げにでも理解できたのは、立花先生が大学の研究室で定期的に場を与えてくれたおかげである。その時間は、長らく私にとってはあまりに当たり前の生活の一部となっていた。

気心が知れ過ぎていただけに甘えてしまいがちで、こちらが何も継承できないままいなくなれたことが心残りだ。先生が投げこまれた瓶をこれからどんな風に掬い上げたらいいのかと思わずにはいられない。

フリオ・コルタサル『海に投げこまれた瓶』鼓直・立花英裕訳、白水社、1990年



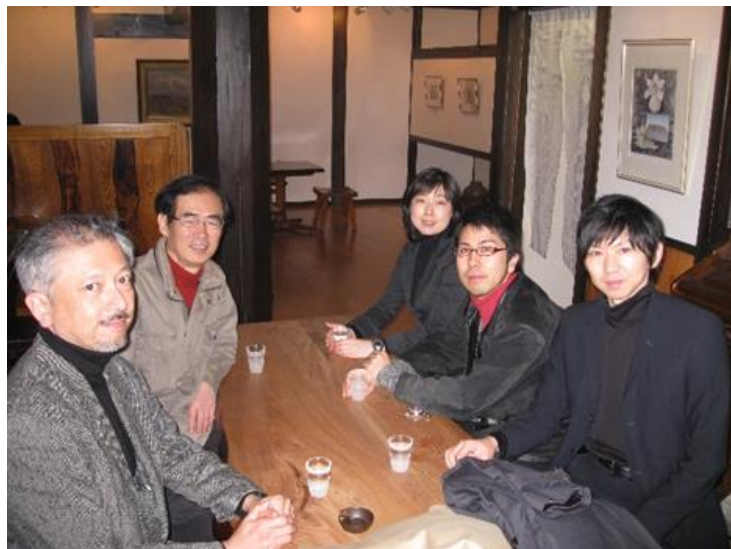
研究会への参加を振り返って——立花先生に感謝をこめて

工藤晋（都立多摩科学技術高等学校）

立花先生に初めてお会いしたのは2001年か2002年頃ではなかったかと思います。当時東京大学総合文化研究科言語情報専攻博士課程に社会人学生として在籍し、グリッサンの小説を読んでいた私は、アメリカから帰国されたばかりの管啓次郎先生のゼミを通じて中村隆之さんや大辻都さんと知り合い、二人から立花先生が主催する *Le discours antillais* 輪読会に誘われて先生の研究室に通うようになりました。難解なグリッサンの評論を何とか読み解こうと四苦八苦した日々は自分のフランス語読解力を鍛える最高の経験でした。研究会のあと早稲田の中華料理屋に繰り出して放談の限り(?)を尽くしたのも懐かしい思い出です。*Le discours antillais* を大方見渡した後、2009年頃からテクストは *La cohée du Lamentin* に移りました。立花先生がサバティカルで日本を離れた1年間は、当時大東文化大学で講師をされていた中村さんが研究会の牽引を引き受けてくれました。夕闇迫る大東文化大のゼミ室で、中村さんと二人で *La cohée du Lamentin* のヴァレリオ・アダミ論を訳し進めたときのことを何故か鮮明に覚えています。立花先生が帰国され、*Lamentin* を読了したあと、セゼール研究の福島さんが参加したこともあって、雑誌 *Tropiques* のエメ・セゼール、シュザンヌ・セゼール、ルネ・メニルによるいくつかの論文を取り上げました。さらにアフリカ文学専攻の村田さんを迎えてカリブ海からアフリカへと研究会の視野は広がり、2018年からレオノラ・ミアノの *L'impératif transgressif* を読んでいます。

コロナの影響でオンラインとなった研究会に、体調を崩された先生は亡くなる直前まで病室から参加されました。ポスト・グリッサンと言っても過言ではないスケールの大きなミアノの評論について病室から熱弁を振るわれる先生の姿に、散文的な言い方ですが、研究者の根性を垣間見る思いがしました。この研究会は先生の生を最後まで支えたのだと思います。

先生にお声をかけていただいたおかげで、日本フランス語圏文学研究会が立ち上がった2008年11月の岩手大学仏文学会での研究会、2013年10月の別府大学仏文学会や2014年京都造形芸術大学での研究会、そして2018年の国際シンポジウムと、いくつかの発表の機会をいただきました。それにもかかわらず、さしたる成果を上げることもなく齢を重ねた自分をふがいなく思うと同時に、いつも暖かく研究室に迎えてくれた先生に本当に感謝しています。先生との旅はいつも楽しいものでしたが、とりわけ別府大会のあと砂蒸しに行ったとき、私にとってはとても威厳のある立花先生が隣で実に気持ちよさそうに砂に埋まっている姿がなんとも愉快で印象的でした。そのスナップを掲載しようと思ったのですが、さすがにやめておきます。代わりに2008年の盛岡の写真を添えます。立花先生、ありがとうございました。私はこれからもうひと頑張りします。



盛岡にて。（左から工藤、立花先生、大辻さん、
鶴戸さん、中村さん）

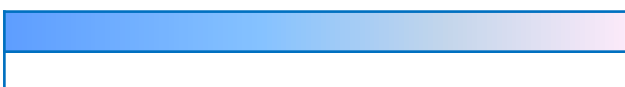
ひとつの悔恨

陣野俊史（文芸批評家、作家、立教大学大学院特任教授）

2017年に偶然旅行したマダガスカルのことがどうにも忘れられず、日本に戻ってから、マダガスカルのフランス語文学を本格的に読むようになった。独りで読み続けることの寂しさからか、旧知の中村隆之さんに会ったおり、アフリカ文学関連の読書会を立花英裕さんを中心に行っていると聞き、会に入れてもらった。だから立花さんに本格的に出会ってから、まだごく日が浅い。読書会の他のメンバーの方々とはとても比較にならない。

それでもどうしてもこの場を借りて、書いておきたいことがある。あれは、2020年の12月のことだから、すでに立花さんは闘病中だった。出版したばかりの『ザ・ブルーハーツ』（河出書房新社）というタイトルの拙著をお送りしたときのこと。すぐにメールで、本をありがとう、という趣旨の言葉をかけてくださった。いつもなら、やりとりはそこで終わり。だが、本の芳しくない評判をめぐって、ちょっと落ち込んでいた私は、立花さんに、小さな愚痴を書いてしまった。すると、時を置かずに、立花さんは長文のメールで、ザ・ブルーハーツにとって私の書いた本がいかに貴重なものであるか、という自説を述べてくださり、あまつさえ、音楽を論じるさいに歌詞だけを取り出すことが、いかに「主体を毀損するか」、毀損する以上、ファンが怒るのは当たり前であるが、毀損してもなお、彼らの歌詞を取り出して書く意味は十分にあるのだ、と励ましてくださった。

私は、感動した。そして、深く反省した。立花さんは、残された貴重な時間を削って、本を読み、厳しくも温かい批評を寄せてくださったのだった。なにか、恩返しを、との思いは果たせなかった。悔恨は、いまま残ったままである。



立花先生を見送った年のある夏の思い出

中村隆之（早稲田大学法学学術院）

2022年9月上旬に荻窪の古書ワルツを訪れた。1年に1度ぐらいのペースだろうか、増えていく自宅の本の一部を整理するために片手で持てるほどの本を袋に詰めては持っていく。恒例の挨拶と会話のあとに店内を見て回る。広い店内の書棚をだいたい見終わったと思ったころ、フランス語の書籍の山に気づいた。古書ワルツがささま書店という別の店だった頃からフランス語の人文系の古書を格安で売っていたから別段驚きはしなかったが、ふと目にした本の副題に「Martinique, Guadeloupe」という文字を見つけたときには心が躍った。私の勤は当たり、そこにはまるでわたしの分身が売ったとしか思えないカリブ海フランス語圏文学関係の原書がここそこに置いてあった。

とはいえわたしは自宅の本を減らすためにここに来た。そう思い直して厳選した2冊をカウンターに持っていたところ、店主からこの書棚の持ち主が立花英裕先生であることを知らされたのだった。

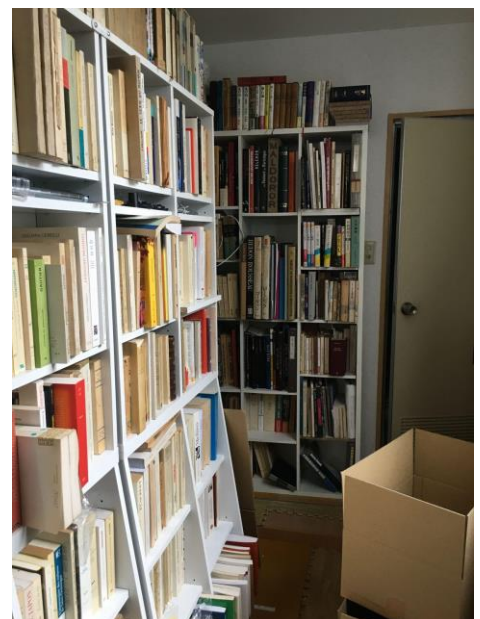
実はこれは何の偶然でもない。立花先生が突然亡くなられてから、身内による葬儀の場に塚原史先生、谷昌親先生と列席した折、立花先生のご家族と親しい塚原先生から、私と谷先生は蔵書の整理を託されたのだった。

立花先生は、退職してからご自宅の近くにアパートの一室を借りて、そこをご自身の研究室のように利用する予定であったようだ。このため、主人がいなくなったそのアパートの一室にはたくさんの本があるという。その本の処分の仕方として適切な方法はないものか——そこで立花先生のカリブ海方面関係の仕事を知るわたしは、立花先生の子女、乃絵美さんの案内のもと、立花先生との長い同僚でもある谷先生と一緒に、アパートの本を見ることにしたのだった。

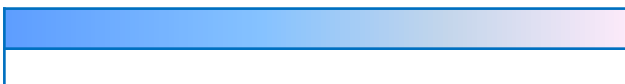
そこにある本の大部分はフランス語の本だった。研究者の書棚とはその研究者の来歴であり未来であるという点で、研究人生そのものだ。部屋全体が図書室と化していた。書棚から整然と並べられた本を取り出して、窓際の机で調べ物をする立花先生の姿がふと思い浮かぶ。書棚は先生の家族や教え子の力を借りて少しずつ整えられていったと聞く。しかし、アトリエが完成して間もなく先生は旅立たれた。

わたしたちは完成したアトリエを見届けたあと、作業に入った。蔵書をなるべくまとまった形で残すために早稲田大学中央図書館への寄贈を第一方針としたわたしたちは、これらの本が図書館に所蔵されているかどうかを一冊一冊チェックしていった。昨年9月11日、22日のことである。和書と残った洋書は古本屋に引き取ってもらおうということで、私が連絡を入れたのが馴染みの旧ささま書店だったというわけだ。

立花先生が亡くなられてから1年が経ち、蔵書整理の作業をしていたときからちょうど1年後に、散逸してしまった先生の蔵書をわたしは買い求めている。こんな不思議な偶然は、しかし、何の偶然でもなかったのである。



立花先生のアトリエ（撮影：中村）



サン・ユーロの後悔

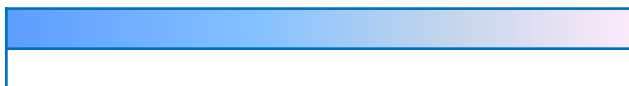
廣田郷士（日本学術振興会／早稲田大学）

立花先生は渡仏される際、自分のような留学中の学生たちにいつも声をかけてくださった。晩秋のパリ、ちょうど『クレオール of 想像力』刊行に向けて作業が進んでいた頃、先生とポルト・ドルレアンで落ち合ったことがあった。福島さんも合わせて三人で昼食を取って、近況などを報告した。その夜はまた同じ三人で合流し、ポンピドゥー・センターで先生のご友人の講演を聞いた後、再び三人で夕食に繰り出した。ところが、行きつけの中華も満席、良さそうなレストランにもなかなか巡り会えず、三人で夜のパリを延々と歩き回った後、なんとか夕食にありつけた。若い僕らもひどく疲れた夜だった。だが丸一日パリで働いていたはずの先生は、疲労などおくびにも出さず、軽やかな足取りでパリを歩き、終始笑顔で振る舞っていた。とても華やかに見えていた先生のお仕事の裏には、地道でたゆまないエネルギーがあった、そう思わされた夜だった。

先生の明晰で鋭いフランス語での講演は、僕にはいつも憧れだった。このときの先生の来仏の目的も、ラ・ヴィレットで行われた大規模なシンポジウムで発表することだった。確か「時間」をめぐるシンポジウムだったと思う。分野や国籍を問わず世界中から様々な研究者が集って開催されたこのシンポジウムでの先生の講演をぜひ聞こうと、当日午後にラ・ヴィレットに僕もかけつけた。だがシンポジウム会場に入ろうとする僕を、受付のフランス人が呼び止めた。「チケットをお求めください」。シンポジウムが有料とは珍しい、日本人学生は渋々財布を出しながら値段を尋ねると、「サン・ユーロ」。まあ自分の聞き損じだろう。リスニング能力の錆びついた留学生は、財布から5（サンク）ユーロを出した。すると受付は「100（サン）ユーロ」とカード決済機を見せつけてきた。さすがに100ユーロという大金なんて...。結局貧乏学生は、先生の講演を聞くことなく、5ユーロ札をポケットに入れてすげすげと帰るだけだった。

夜のパリをクタクタになるまで一緒に歩き回ったとき、すでに先生は病魔に侵されていたこと。そしてたかだか100ユーロをケチったがために、僕は先生との最後の面会のチャンスを失うことになったこと。これらのことはすべて、留学を一旦終えて帰国した後に僕は知った。あの時大金に思えた100ユーロが、今となってはなんとちっぽけな額に見えることか。後悔ばかりがつきまとう。いつもエネルギーに溢れていた先生から頂いた、金額では計ることのできない学恩を返せないまま。

あのとき聞くことのできなかつた先生にとっての「時間」とは、一体なんだったのだろうか。その答えは、先生の残されたお仕事の中にも、そして先生との思い出の中にも、きっと刻まれているだろうと思う。遅々として進まない近況を報告するばかりだった自分は、もう一度、先生の残した言葉にしっかりと耳を傾けてみることだろう。先生に返すことのできなかつた「時間」を、そして先生から聞き損じていたことを、取り戻すために。



聞きあう境域の旅人

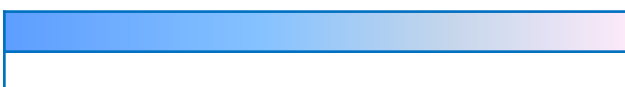
福島亮（ソルボンヌ大学文学部博士課程）

2019年11月。国際会議に参加なさるため、立花英裕先生はフランスにいらしていた。会議が終わるや否や、今度は論集『クレオール of 想像力』の編集作業を行うため、当時私が住んでいた学生寮の一室に先生はおいでになられた。夕方には別件があったため、時間は限られていた。作業は切羽詰まっていた。途中、日本のご家族から先生に電話があった。私は部屋を出た。10分ほどして、部屋に戻り、また作業を開始した時だった。先生は疲れたとおっしゃり、ベッドに横になられた。夕刻だった。作業を切り上げ、大学都市からB線でシャトレまで共にむかった。途中、先生は車窓に額を押し付け、ほとんどお話しにならなかった。後になってから教えていただいたのだが、あのB線のなかで、先生はお身体の異変を悟られたらしい。

先生の研究室を私がはじめて訪れたのは2012年だったと思う。だからご一緒できた期間は10年に満たない。それでも、先生からいただいたものは数知れない。今でも続いている輪読会のほか、セゼールの『帰郷ノート』や、フォンクア先生のセゼール評伝を原書と一緒に読んでくださった。二人で読書会を行う際、場所は決まって早稲田の喫茶店シャノアールだった。そのシャノアールも今はもうない。私の隣の裏に浮かぶ先生は、アンティル大学マルティニク校のベンチに腰掛け、微笑んでいらっしゃる。それは、2017年3月13日から21日まで、先生とともにマルティニクに滞在した時のお姿。私にとって初めての海外旅行でもあった。その最初の旅で築いた人間関係が今でも私を支えてくれている。

パリから日本にお帰りになった先生が入院なさったと知ったのは、それからしばらくしてからのことだった。先生は電話で病状を教えてくださいました。以降、先生は時折電話をくださった。化学療法がはじまった頃だったと思うが、ある日、受話器越しにルチアーノ・ベリオの『シンフォニア』を聴いたと唐突におっしゃり、その第3楽章で歌手が口にするKeep goingという言葉が私に贈ってくださいました。そんな言葉があったらどうか、と思い、『シンフォニア』を聴きかえしてみた。それは強い口調で素早く叫ばれる言葉だった。治療のさなか、あの強い叫びを掴みとり、手渡してくださったことに胸打たれた。

フランス語を通して見えてくる聞きあうような荒野を、先生は縦横無尽に、休むことなく旅なさった。まるで『マルドロールの歌』第6歌の、あの神出鬼没のコオロギのようだった——*« N'avez-vous pas remarqué la gracilité d'un joli grillon, aux mouvements alertes, dans les égouts de Paris? »*——。地域や領域に即した専門化や細分化に対する拒否を、先生はもっぱらお仕事で示され、多くの径を拓いてくださったのだと、今ならばわかる。だが、もうお礼の言葉は届かない。ご葬儀の翌月、私は「ふらんす、この聞きあいの境域」という小文をものし、こっそりと先生に捧げ、Keep going と繰り返した。



立花英裕という日常生活の冒険者

村石麻子（福岡大学）

立花先生に初めて直にお会いしたのは、コロナ禍まだまだ先行き不透明な2020年の夏だった。当時仕事の悩みを抱えていた私に、ご病身にもかかわらずお声がけ下さって親身に話を聞いて下さった。先生の若い頃のお話を交えつつ、励まして下さった。胸のつかえがとれ、また出直そうと思ひ至り、それが新しい道につながった。

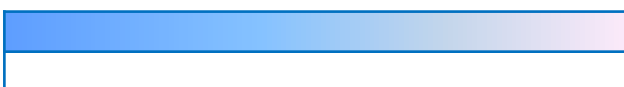
立花先生はフランス文学が取りこぼしてきた辺境にまなざしを注いできた人だが、その修養時代から既に遠い地平を見ていたように思う。私の父と同世代でいらしたので学生運動の話をしたら、とんと関心がなかったと仰っていた。母校の安田講堂が占拠されるもどこ吹く風、カミュを誦んじるほど読んでいた当時、丸紅に受かったのは入社試験で偶然『異邦人』が出題されたからにすぎないと、そして最初から3年後に辞める心づもりで就職したということだった。時代の空気を読むセンスが問われる商社を足掛かりに、さらにその先を見据えていた先生の突き抜けた精神の有り様に、感じ入った記憶がある。

そして大江健三郎『日常生活の冒険』を面白く読んだと仰っていた。先生が自らを重ね合わせていたのが、秩序を攪乱するアナーキーな斉木犀吉か、はたまた根は小市民的で意気地のない政治青年かどちらかは知る由もないが、確かに先生は、斉木のような破滅の道まっしぐらの破天荒さとは異なるが、凡庸な日常を倦むことなく精神の冒険に挑み続ける人だったし、果ては何かを求めてアフリカまでたどり着いた。そして斉木が心気症に苦しむ大江と思しき語り手を救い出したように、不器用な私を引き上げて下さった。

今でもアフリカかどこか、廣大無辺の宇宙のいずこからか、精神の冒険にお誘い下さっているような気がしてならない。



Musée Régional d'Histoire et d'Ethnographie de Martiniqueにて（撮影：中村）



必修仏語立花先生クラス出身の一法学部生の思い出

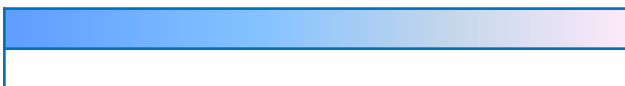
森綾香（早稲田大学大学院法学研究科修士課程）

2017年春、早稲田大学法学部へ入学した私は、新生に必修として課された第二外国語の授業で偶然にも立花先生のフランス語のクラスに所属することとなりました。立花先生の授業は、常に穏やかで柔らかな雰囲気でした。一年の間は主に初級文法の学習に充てられましたが、同時並行で「シェルブールの雨傘」を台詞の聞き取り練習がてら鑑賞したり、二年に進むとエメ・セゼール関連の文章を講読したりと、今思えば、楽しみ・語学能力向上・語学以外の学びという複合的な要素が存する魅力的な授業でした。クラスの学生からも慕われ、先生を交えてフランス料理のレストランでのクラスの食事会なども行われていました。

先生はフランス語を本気で身につけようとしていた私によく声を掛けて下さいました。仏検の勉強を見て頂くことになり先生の研究室へ初めて伺った時に目にした、うず高く本の積まれた本棚の並ぶ、ある種の神聖さを感じる空間、そしてその空間の静謐さに馴染んだ先生の姿は、今でも瞼の裏に焼き付いているような強い印象が残っています。月日が流れ、先生は機会あるごとに昼食や喫茶店に誘って下さり、幾度もお話を重ねることになりました。この対話の時間というのは、いかに幼稚で浅はかな思考であっても真剣に聞いて頂ける、そしてその返答として何倍もの豊かな知識や深いお考えをご提示下さるといふ、知的刺激に満ちたまさに贅沢な時間でした。立花先生は、周囲の人間一人一人につき、心からその人を案じている、見て下さっている、その種の誠なる優しさというものを擁していらっしゃるように思います。

早稲田を定年退職された後も、先生がパリにて「時間」に関する大きな講演会で講演者として参加をされた際、私がフランス留学中であつたために現地でお会いする機会を得たり（パリの街を並んで歩きながら、やはりこうやって街を歩かなければその都市というのは味わえないものだ、という旨を仰っていたのを覚えています）、仏語文献の輪読会でご一緒したりと交流を続けさせて頂いていました。

或る日のこと、先生は「世界に対して大きく目を見開いておきなさい」と仰いました。この言葉は独自の解釈を介してその後の学部時代の私の大いなる支えとなったため、その旨をこれまでの感謝と共に卒業のご報告のメールに記した所、筆者に対しては「心に余裕を持って」という意味で言ったのだと、また追々議論しましょうと、お返事を頂きました。かかる議論を交わすことを終に成し得ずして、今に至ります。先生の真意をご本人の口から聞くことの叶わなかったのは口惜しいことですが、先生の言葉を心に刻み、先生の想いを想像の中で燦らせつつ、先生に受けたご恩をこれから間接的にでもお返しできるよう、努めて行きたい所存です。



標、声

森脇慧（早稲田大学大学院）

立花先生とはじめてお会いしたのは、私が学部四年生になった頃だったように思う。当時は大学院への進学を考えていたこともあり、長く付き合えるテーマはなんだろうかと図書館で本を手当たり次第に読んでいた。そんな時、シュルレアリスムからの文脈でエメ・セゼールの『帰郷ノート』に出会い、そこからフランス語圏文学に強く惹かれることになった。その後、ちょうど学年下でセゼールに関心を寄せていた福島亮くんからの紹介で、当時立花先生が主催していた「グリッサン輪読会」、現在のフランス語圏研究会の前身にあたる勉強会に参加させて頂いたことがきっかけだった。

はじめて参加する「研究者の勉強会」という意味でも、輪読会は刺激的であった。中村隆之さんや、大辻都さん、工藤晋さんをはじめ、ここでは名前を挙げることができない多くの方々との出会いは、この輪読会と立花先生なくしては考えられなかった。何より、立花先生は私にとって、まさにフランス語圏文学の *Initiateur* であった。テキストが成立した背景にある歴史・社会・文化、他のテキストとの間に張りめぐらされた糸、そしてテキストそれ自体が持つ論理。フランス語圏の文学を読む際に（あるいは文学を読むうえで）大切な多くのことを教えて頂いた。そして一介の学部生に過ぎなかった私でも「この輪読会に居場所がある」と感じる事ができたのは、相手が学生であっても積極的に意見に耳を傾け、真剣に検討してくださった先生のお人柄あつてのことだった。

立花先生にまつわる思い出で一番印象に残っていることは何かと考えた時、なにより思い出されることがある。2015年にマルチニック出身の「スラム (slam)」の詩人ジュリアン・デルメール氏が講演のために来日していた折のことだ。講演とは別に、デルメール氏をゲストにグリッサン輪読会のメンバーでセゼールの作品を読む会がおこなわれた。『奇跡の武器』からデルメール氏が選んだいくつかの詩を輪読しつつ、コメントをしていく形式だったように思う。会が終盤に差し掛かった頃、なんのきっかけだったかは忘れてしまったが、立花先生がデルメール氏とセゼールのポエジーについて討論していた。なぜかは分からないが、その時の先生の声が今でも忘れられない。それは熱のこもった楽しげなその声こそが私が憧れを抱く研究者の姿だからなのかもしれない。

テキストを読み、訳し、論文を書いていると、時折、立花先生の声が聞こえてくることがある。「この訳は美しくないんじゃない?」「もっと踏みこんで読まない?」「J'ai faim! これじゃあまだ食べ足りないよ」。頭のなかを訪ねてきてくださる立花先生に楽しんで頂けるような論文を、私もいつか書けるだろうか。

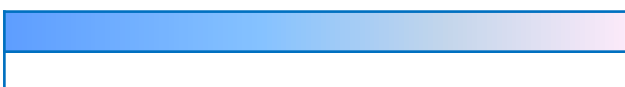


英語圏文学専攻の大学院生だった私がカリブ読書会と出会うまで

吉田朱美（京都府立大学）

大学院時代、早稲田大学エクステンションセンターの講座を一度だけ受講したことがあり、それが立花英裕先生の「時事フランス語」でした。予習はあまり求められず、衛星放送で届いたばかりのニュースを幾度も視聴しながらみんなで一緒に書き取ったり、あるいは時の話題として先生がお持ちくださった「ワールド・カップ」関係の記事を輪読し、語彙を習得したり。「La Coupe du Monde」の語を私が覚えたのもこのクラスにおいてでした。貿易に関わるお仕事を長年されてきたクラスメイトから、ご自身の体験に基づいた補足の説明が加えられることもありましたし、立花先生がスペイン人のお連れ合いとの生活の中で驚いた出来事についての雑談で場を和ませてくださるようなこともあったりと、少人数で双方向的な「ゆるい」雰囲気の中、無理なくフランス語になじみつつ幅広く知識も身に着けていくことができ、受講期間中に実用フランス語検定準1級に合格を果たしました。最終回近くの講義後、立花先生が大学近くのお好み焼き屋さんを受講生のみんなをお連れ下さったことがあり、そこで仏検合格についてご報告しました。

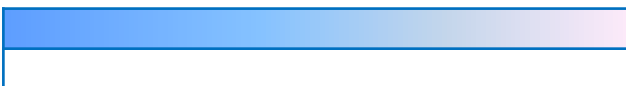
イギリス留学からの帰国後、まだ職探しのイメージなどもあまりつかめぬ中、立花先生にメールで自分の近況をお伝えしたところ、「非常勤などはなかなか紹介してあげられないかもしれないけれど、エドゥアール・グリッサンを読む読書会をやっており、東大の学生さんも来ています」とのお返事をいただきました。お恥ずかしいことにグリッサンがどういう文学者であるのかもその頃は全く知らなかったのですが、「タダでまた立花先生の指導を受けられるならば」と早稲田に向かいました。来るもの拒まずの姿勢で気持ちよく受け入れてくださった立花先生と素晴らしい仲間たちのおかげで出会ったフランス語圏の文学世界は刺激と楽しみに満ちたものでした。また、分担しながらみんなでゆっくり、じっくり考え、読み進めていく立花先生の精読方式は、のちに私が教員となり専門科目のゼミを運営していく際
のよきモデルとなっています。



§ 2 立花先生の業績をめぐって



Université des Antillesにて（撮影：福島）



立花英裕先生の思い出——ロートレアモンからケベックへ

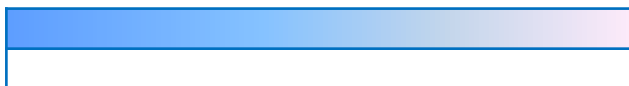
一條由紀（北海学園大学）

私と立花先生との出会いは20年以上前に遡る。早稲田大学で修士課程の院生だった頃、法学部でTAを探していると人づてに聞き、面接を受けたのが始まりだったと思う。私の研究対象がロートレアモンだったこともあり、そこから立花先生との長いつきあいが始まったのだった。修士論文・博士論文の副査としてご指導いただいただけでなく、『カイエ・ロートレアモン』日本特集号の準備などに携わらせていただいたことは大変貴重な経験となった。立花先生はいつも温かく接してくださった。博士号学位記授与式後の祝賀会に顔を出して下さったり、就職が決まった時にもお祝いをしてくださった。立花研究室でのロートレアモン読書会や、バルセロナのコロックで一緒したことなど、思い出はつきない。立花先生を知る人なら誰もが賛同して下さることと思うが、本当にやさしい方だった。

一方で、立花先生はその穏やかな立ち居振る舞いからは想像もつかないほどの情熱とエネルギーを秘めている方だ。その一端はフランス語圏文学研究会設立時にも垣間見ることができた。ケベック・スタージュへの参加を機にケベック文学に関心を持ったことや、立花研究室での通称「グリッサン輪読会」に何度か出席させていただいたことがきっかけで、私も研究会の立ち上げに関わらせていただいたのだが、立花先生の熱心な活動ぶりに圧倒された。私はホームページの作成などを仰せつかったが、当時在外研修中でケベックにいらっしゃった立花先生は、時差をものともせず、わざわざスカイプで打ち合わせの機会を設けてくださった。ホームページ作成ソフトのテンプレートをそのまま使いたくないという立花先生の強いこだわりのため、何度もデザインを修正し、なんとかOKをいただいた時にはほっとしたものだ。

近年は残念ながらなかなか直接お会いする機会がなかったが、コロナ禍でオンライン開催となった講演会や学会でお顔を拝見していたので、昨年の訃報はあまりにも急なことに思われ、大きなショックを受けた。振り返ってみれば、ロートレアモンからケベック文学へと、意図したわけではないのだが、私の研究遍歴はまるで立花先生の後を追っているようだ。もうご指導を仰ぐことができないのが本当に残念である。

深い感謝の念とともに、ご冥福をお祈りいたします。



立花英裕先生とケベック研究

佐々木菜緒（白百合女子大学非常勤講師）

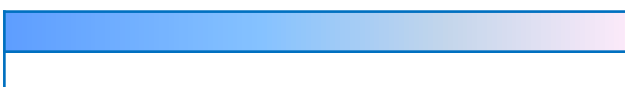
立花英裕先生のケベック研究に関する業績について述べるにあたり、私が先生と多くの時間を共有した日本ケベック学会（AJEQ）の活動の思い出という視点でまとめてみたい。特に講演会や学会でのご報告など、先生の数多くのご活躍の一端に直に触れた経験を中心に述べたいと思う。

まずは、私が立花先生に初めて出会った2008年の出来事からはじめたい。2008年は個人的にも国内のケベック研究の観点からいっても大きな転換点である。5月日本カナダ大使館で講演会「フランス語のはなし：カナダにおけるフランス語」が催され、私はそこで初めて立花先生と小畑精和先生という研究者のことを知った。立花先生は翻訳出版されたばかりの『フランス語のはなし』（大修館書店、2008年）を紹介しながら、フランス語の多様性や歴史的な重みなどについて話されていた。私がケベック文学研究を志したのはこの出来事がきっかけだった。きっと私と同じように、先生がなされたお仕事を通じて世界のフランス語やケベックに関心をもった人は数知れないだろう。そして、同年10月AJEQが創立され、国内のケベック研究は新たに門出した。

AJEQの発起人の一人だった立花先生は、学会活動の中心でありつづけた。先生のご活躍を振りかえれば、先生はケベックという地域を通して、社会の営みにおける知識人の役割を問うことに関心をもたれていたことがわかる。たとえば、2013年5月AJEQ研究会にて「ケベック文化の形成と知識人——ジェラルド・ブシャルが見た文化的亀裂」というタイトルで報告されている。これは、先生が翻訳者として携わった『ケベックの生成と「新世界」』（2007年、彩流社）に見られるケベックの知識人のあり方について分析された内容である。そのときに説かれていたケベック独自のパラダイムの鍵概念である「私生児 batard」ということばは、その後私にとってケベック社会を捉える上での決定的な視座になった。ケベック社会における知識人の状況について先生はさらに論文「ロベール・シャルボノーとフランス・レジスタンス派との論争を巡って」（『ケベック研究』第7号）で考察を深められている。

一方で、立花先生は国内のケベック研究の基礎研究が必要であることを説かれていた。説くと同時に、先生ご自身でその必要性に応えることを実践された。たとえば、2016年は国内初のミロン研究が為された年だといえる。同年のAJEQ全国大会は、私が先生と最初で最後に一緒に登壇した思い出深い大会だが、そのとき先生は「ガストン・ミロンとローランティッド」というタイトルで、「静かな革命」の時期の文壇を率いた大物ミロンの思想的背景について、ローランティッドという風景を讀解することを通して報告された。先生の詩人としてのミロンへの強い関心は『ケベック詩選集』（彩流社、2019年）において存分に反映されることになるが、社会、歴史、文学など幅広い領域からケベック独自の思想潮流・思考体系を捉えることを重視された。それが基礎研究の要であり、今国内において必要な研究姿勢であることを先生ご自身で示されたのである。

このように、ケベック研究を通じて立花先生のご活躍を想うとき、偲ばれるのは知識人かつ研究者としての先生の堅実で誠実なお姿である。そのような先生と2008年から約18年間AJEQで一緒できたことを只々光栄に思う。そしてこれらの経験が私にとって研究者を志した礎になったのだと強く思うのである。



立花先生との不思議なご縁——ラジオ講座とスタンダード

田戸カンナ（昭和女子大学非常勤講師）

私にとって立花先生との「出会い」は今からかれこれ25年以上も前にさかのぼる。当時、私はNHKのラジオフランス語講座を日々聴いていたのだが、ある時、立花先生が入門編をご担当されることになったのだ。先生の穏やかなお人柄を思わせるソフトな語り口が今も忘れられない。学習者の立場に立った先生の解説からどれほど多くのことを学ばせていただいたことか。

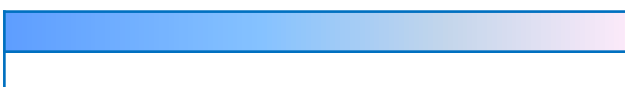
講座の中で何よりも印象に残っているのはスケッチの主人公である日本人の青年がグアドループに旅をし、スケッチの場面がフランス本土からいきなりカリブ海の島に移ったことである。当時、スタンダードを研究していた私はグアドループについてほとんど何も知らず、知らないがゆえにこの島の存在が新鮮に感じられると同時に、インパクトがあった。

その後、グアドループとは接点もなく、立花先生とも直接お会いすることもないまま20年以上の月日が流れた。その間、私はスタンダードが小説家になったきっかけをつくったデュラス公爵夫人を研究しはじめたことによって、黒人奴隷貿易や黒人奴隷制、植民地の問題に興味を抱くようになった。かなり長い間自分なりに一人で研究を進めていたところ、黒人と関わるテキストを読む輪読会が行われていることを知り、今から数年前に参加させていただくようになった。その輪読会に初めて出席した際に立花先生に「再会」することになった。二十数年ぶりの「再会」であったが、立花先生はラジオ講座の時の優しい先生そのままであった。

輪読会で先生とご一緒できたのは短い期間となってしまったが、先生から直接お教えいただく機会がもてたことを光栄に思っている。コロナ禍により輪読会はオンラインでの開催となったため、先生と直接お会いしたのはたった一度しかなかったことになるが、ラジオ講座の楽しい雰囲気を出すと、先生とはご縁があったのだとつくづく思う。今や私にとってグアドループは欠かせない研究対象になっている。



マルチニク（撮影：福島）



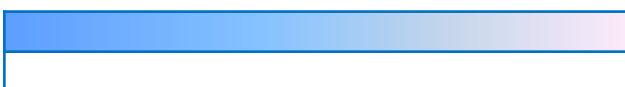
立花英裕先生とフランコフォニー

鳥羽美鈴（関西学院大学社会学部）

立花英裕先生には早稲田大学の研究室にて開催された読書会及び学会活動などにおいて、大変貴重なご助言や励ましのお言葉を多々頂きました。今なお、早稲田や学会会場に足を運べば、立花先生がいつものように暖かい笑顔で迎えてくださるような気がしてなりません。立花先生とは日本国内のみならず国外の学会でも度々ご一緒させて頂きましたが、国際学会の風景写真の一部をここに掲載させていただきます。2017年に、日本から遠く離れたマルチニック島にて開催された国際フランコフォニー学会に参加時、筆者が撮影したものです。今から約5年前となりますが、ここで立花先生は「Aimé Césaire et Gaston Miron : poétique de décolonisation」と題する発表をなさいました。立花先生の研究領域は、その多岐にわたる業績から明らかなように、「フランス文学者」という枠組みに留まるものではありません。一般に「フランス文学」と言われる作品のみならず、「フランコフォニー文学（またはフランコフォン文学）」と分類される作品をむしろ積極的に取り上げ、さらにフランス共和国のみならず、その他のフランス語圏諸国の社会にも目を向け、政治や歴史的問題にまで詳細にわたって目配せしたうえで、精緻なテキスト分析を進めておられました。

フランコフォニー研究者の一人である筆者は、フランス共和国や「フランスのフランス語」のヘゲモニーを廃したうえで、「フランコフォニー文学」に「フランス文学」が包摂されてしかるべきと考えますが、フランス市民であるセゼール、ファノン、グリッサン、コンデらの作品は往々にして、「フランス文学」とは別枠の「フランコフォニー文学」として下位あるいは周辺に位置づけられます。さもないと、言語と文化は相互に交換可能な概念ではないにもかかわらず、フランス語という同じ言語を用いていることから、多様な地理的出自をもつテキスト群を「フランス文学」として一括りに語る傾向があります。

そのなか、重要な転機となるのは、フランスで権威ある文学賞をマルチニック出身のグリッサンらが受賞したことです。これによって、伝統的に「フランス文学」と理解されてきたものと、「フランス語文学」や「フランス語表現の文学」と呼ばれ始めていたものとの力関係が大きく変動することとなります。立花先生が精緻な読解の対象として読書会で取り上げた作家の一人がまさにグリッサンでした。諸フランコフォニー文学の真の「自律化」と真摯に向き合い、これに非フランス語圏の日本の研究者として先駆的に果敢に取り組まれていた立花先生の業績が私たちに与えた影響の大きさは計り知れません。この場を借りて、これまでのご指導に心より感謝いたしますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。





Université des Antillesにて（撮影：鳥羽）

立花先生の思い出——フランス語教育と文学

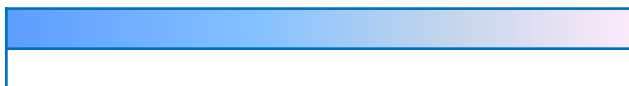
中野茂（早稲田大学高等学院）

立花先生と初めてお会いしたのは、2004年にフランス留学から帰国した数か月後のことだった。早稲田大学大学院文学研究科でエドゥアール・グリッサンの *Le Quatrième Siècle* を読む講義を受講させていただいた。ゆっくりと小声でご説明してくださるお話に耳を傾けていると、予習では見えてこなかった原色の世界が繰り広げられ、それまで知っていたフランス文学とは全く異なった世界を発見することができた。授業後は、何度か受講生を昼食に誘っていただき、高田牧舎で楽しいひと時を過ごした。ある昼食の折、当時フランス語教育学会の会長だった先生から、フランス語教育国内スタージュをご紹介いただき、これがきっかけでフランス語教育の世界に入ることができた。また一年の講義が終わる頃、エドゥアール・グリッサンの輪読会へもお誘いいただき、数年間、難解ではあったが大変濃密なグリッサンの世界を、輪読会のメンバーの方々と発見することができた。

そんな折、2008年立花先生からお声がけいただき、日本フランス語フランス文学会と日本フランス語教育学会共催の国際学会（「東アジアの中等教育におけるフランス語——いかに21世紀の複言語能力を育てるか？」）の組織委員として活動する機会を得た。もちろん、発表原稿が直前まで届かないなど小さなトラブルは多々あったが、これほどすべてがスムーズに準備そして開催できた国際学会もなく、夏目坂のお店で行われた打ち上げでは、組織委員のメンバー全員が「とにかく楽しかった」と口にしていたのをはっきりと覚えている。この国際学会の発表は『いかに21世紀の複言語能力を育てるか——中等教育における外国語(仏・独・中・韓・日)』（立花英裕、橘木芳徳、飯田年穂、北山研二、山崎吉朗、中野茂共編著、朝日出版、2010年）というタイトルで出版された。

そんなある日、先生よりルネ・ドゥペストルの短編集の共訳のご提案をいただいた（『ハイチ女へのハレルヤ』ルネ・ドゥペストル著、立花英裕、後藤美和子、中野茂共訳、水声社、2018年）。ある夕方共訳者の後藤先生と立花先生の研究室にうかがい、2時間近くハイチの歴史や文学に関して丁寧にご説明いただいた。この不思議な魅力を持つ本を訳していく作業はとても楽しく進んだが、出版前に私が担当した箇所冒頭部分に丁寧に手を入れていただいた際に、平板な訳文が詩的な文章に変質していたのに驚いたことを克明に記憶している。

常に穏やかな独特のリズムで深遠なテーマをさらっと語っていた先生の口調は、いつまでも私たちの記憶に残るだろう。授業や輪読会、国際学会や共著、さらには共訳も先生の不思議なリズムに乗りいつの間にかすべてがスムーズに進んでいった。ルネ・ドゥペストルの短編集の世界に迷いこみ、夢と魔法の世界に入りこんでしまったのではと思うほどである。しかしこの夢と魔法のリズムの裏には、先生の全体を見渡せる該博な知識と深い知性、詩的な感性と言語感覚、そしてなによりも優しさがあったことは忘れるべきではないだろう。



立花先生の思い出——ロートレアモンからフランス語圏へ

西川葉澄（慶應義塾大学）

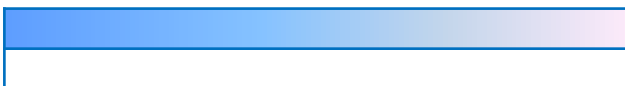
立花先生に初めてお目にかかったのは、1996年くらいで、ロートレアモン研究のミシェル・ピエルサンス先生がモントリオールから来日した講演会だった。同時期にコンピュータ支援による人文学研究についての発表もされていた。インターネット接続を電話線からする時代だったが、立花先生は既にEメールを使いこなしており、私にメールでTAのオファーをくださった。しかし当時はメールのチェックは週に2回程度が普通という時代で、メールを見た時は既に立花先生の折角のご厚意に間に合わず、チャンスを逸した時の衝撃は今も覚えている。

その後、モントリオール大学に留学したが、同年にその地でロートレアモンの国際シンポジウムが開催された。立花先生は現地で発表原稿調整のため、Petit Robert とプリンターを購入し活用されていたが、帰国時にそれを全部くださった。貧乏留学生だったので「神はいる」という感じだった。私はその後さらにパリに移動したが、パリでも先生と奥様のソニアさんにシャンゼリゼでお会いした。ご自身のパリ留学中に大学食堂であらゆる人に声をかけて会話の実践をしたというコミュニケーションの怪物のような語学上達の秘訣を指南してくださった。奥様ともそのようにして出会ったとのことだった。

帰国後には、立花先生からさまざまなシンポジウムの裏方として準備を手伝う機会をいただいた。いつも何かの中心人物だった立花先生は、さまざまな先生を紹介してくださった。また、若手研究者にとっても手厚く、お忙しい中時間を作って勉強会を主催してくださった。ロートレアモンの伝記を一條由紀さんと三人で読む読書会はすぐ終わってしまったが、フランス語圏文学研究会の前身でもあるグリッサンのテキストを読む読書会にもお誘いくださり、貴重な知的刺激をいただいた。立花先生はいつも楽しそうにみんなの話聞き、的確なアドバイスを与え、読書会が終わると親鳥のように参加者を率いて食事に連れて行ってくださった。

先生のご興味がロートレアモン研究からフランス語圏文学に移行して、日本ケベック学会の会長としてもご活躍されるようになって、いつも本当にお世話になった。学会などではいつも率先して質問やコメントをしてくださるので、立花先生の存在感が人々に与える安心感は非常に大きなものだった。

晩年は精力的に翻訳を多く手掛けておられた。成し遂げられた数々の偉業に尊敬の念が絶えることがない。今年ダニー・ラフェリエールについて研究発表をした際に、『吾輩は日本作家である』などをはじめ立花先生がなされた翻訳から大いに学ばせていただいたが、同時に立花先生にお伺いしたいことが山のように出てきた。しかし後の祭りだった。もっと早く取り組んでおけばよかったと心から後悔している。先生とお会いできなくなってからも、偉大な立花先生の後についておぼつかない研究活動をしているような気がしている。



立花英裕先生の思い出——ハイチ文学とケベック

廣松勲（法政大学国際文化学部）

思い起こしてみると、私が初めて立花英裕先生のお名前を知ったのは、1990年代末頃、まだ学部生だった時代でした。当時フランス語の教員免許取得のため、仏文科の授業にも顔を出していた私は、大学近くの古本屋さんにて、偶然に『危険な純粹さ』（ベルナール＝アンリ・レヴィ著、1996年）と題された翻訳書を手にとったのでした。私の知識では読み解くのが難しい書籍であったとはいえ、名前も知らないフランス人論者による論考に引き込まれつつ、そのような書籍が日本語で読めることの喜びを覚えたものです。同時に、そのような翻訳書を読者に届けてくれた翻訳者の名前も、記憶（の片隅）に確りと刻み込まれることになりました。

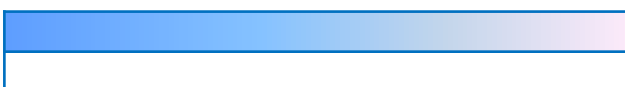
その後、フランス語圏文学の研究者を目指す途上で、再び立花先生の翻訳書に出会うまでにそれほど時間はかかりませんでした。いわゆるクレオール文学の翻訳書ではなく、ハイチ文学の翻訳書『月光浴』（2003年）を介して、再び立花先生のお名前を目にしたときには、どのような研究者・翻訳者なのだろうかと、初めてその人物像を思い描くことになりました。とりわけ、ハイチ社会のみならずハイチ文学に関する解説は、カリブ海域文学に関する深い理解と豊富な知識・体験に支えられたものであり、驚きをもって読み進めたことを忘れられません。

実際に立花先生とお会いすることになったのは、私がモントリオール留学中に「日本ケベック学会」が設立されてからでした（2008年頃）。特に先生が会長職に就かれてからは、学会活動やその運営を通じて、少なからず先生と接する時間を得ました。そのような中で、先生の広大な関心や知識、そして理知的だけれど温和な話し方に触れ、学術的な興奮のみならず、不思議な居心地の良さを抱いてきました。同時に、それまで一読者として触れてきた、ある意味で架空の存在であった方と接することになかなか慣れず、ぎこちない受け答えが続いたことを思い出します。

個人的な研究指導の場面では、先生の研究室において、直接私の研究についてコメントをいただいたことが深く記憶に刻まれています。とりわけ、「特定の作家・作品に注目した個別具体的な研究からは距離を取り、もう少し広い視野で論じる・語るべきではないか」という指摘は、今も私の研究上の指針として残っています。考えてみれば、様々な場面・媒体における立花先生の語り口・論じ方は、常にそのような広い視点や包容力に魅力があったのかもしれないと思い起こします。そのような論じ方を会得できるかどうか、勝手ながら、それは立花先生が私に残してくれた大きな宿題のようにも強く感じています。

突然のご逝去に際し、今回を含め、これまでに幾つかの場面で追悼の機会に接しました。しかし、やはりいまだ先生の不在が信じられないというのが正直なところです。これまでに立花先生に触れた研究者たちには、きっと多くの示唆と課題を残してくれたのではないかと思います。私自身、私なりに理解できた先生の言葉とその意味を、これからも考えていきたいと思っています。

先生、本当にありがとうございました。



立花英裕先生とカリブ海文学、その余白

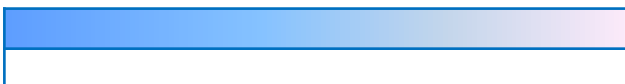
福島亮

カリブ海文学をめぐる立花英裕先生のお仕事を拝見していて気がつくのは、先生のテキストに、ご自身で撮影された写真がかなりの確率で付されていることである。たとえば『現代思想』1997年1月号「クレオール」特集の論攷「エドゥアール・グリッサンにおける不透明性の概念」には、サヴァンナ広場に立つ首のないジョゼフィーヌ像をはじめ、先住民の遺物やマルティニックの踊りの光景、さらには猛毒植物マンシニールなど、計7枚の写真が掲載されている。じつは、これらの写真は、テキストの内容とは直接関係しない写真である。また、『月光浴——ハイチ短編集』（2003年）に先生が寄せた長文の解説「ハイチ現代文学の歴史的背景」——20年たったいまでも、日本語で読めるもっとも充実したハイチ現代文学論だろう——にも、先生が撮影したカイマンの森やラフェリエール要塞の写真が掲載されている。翻訳『ラマンタンの入江』（2019年）の解説も同様で、汽水域の入江の写真が添えられている。

「エドゥアール・グリッサンにおける不透明性の概念」は、カリブ海文学にかんする先生の業績のうち、最初期の仕事のひとつである。グリッサンの講演「文化とアイデンティティ」——同じ号に先生の訳が掲載されている——を踏まえてこの論攷で問われているのは、「不透明性への権利」というグリッサンの思想の核だ。「他」を「同」へと回収せず、「他」のまま受け止めること。これがグリッサンにおける「不透明性への権利」なのだが、先生は文章の末尾でそれを「記号体系の縁を乱す要素に対する『驚き』を維持する努めでもある」と言い換えている。少し強引な解釈かもしれないが、テキストに付された7枚の写真は、先生がマルティニックで経験した「驚き」を焼き付けたものではないだろうか。

立花先生は「驚き」を大切にされた。おそらく先生の最後のお仕事となったと思われるご講演「都市空間と黒人文化資本——ジョゼフィーヌ・ベーカーをめぐる」（2021年7月20日「都市と美術研究所」第19回研究会）においても、シャンゼリゼ劇場で踊るベーカーの映像を分析しつつ、異国趣味に回収されないベーカーの身体性を先生はすくい上げていた。ここにもベーカーの身体性の「不透明性」に対する先生の「驚き」が垣間見える。実際、手もとにある発表用のスライドには、「ジョゼフィーヌの戦略」と題して、「他者の視線に晒しながら、自らを隠す。内面の見えない存在」と記されている。1997年の論攷から2021年の講演まで、先生が一貫して重視してきたのは「驚き」を維持する努め、つまりは「不透明性への権利」であったと言えるだろう。

2018年3月に日仏会館で行われたシンポジウム「世界文学から見たフランス語圏カリブ海文学」において、先生は、セゼールにおける「叫び」についての口頭発表の最後で、陸前高田の一本松に言及し、それを「言語を越えたものが過ぎ去ったあとの沈黙」、「聞こえなかった叫び」として解釈した。テキストの縁に残されたいくつもの写真を眺めながら、被写体の多くが植物であったことにいまになって気がつく。マンシニールもカイマンの森も一本松も、先生にとっては叫びであり、驚きであり、不透明性であったのだろう。人類の歴史に深い傷口を穿った「言語を越えたもの」を、植物は人類とは別の尺度で見つめてきた。先生のカリブ海文学研究の余白には、この、どこか宮沢賢治の童話を思わせる別の尺度への感受性が刻まれている。



「フランス語圏作家小事典」の思い出

村田はるせ（日本アフリカ学会会員）

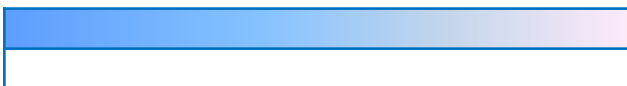
立花英裕先生がメールをくださり、『クレオール想像力：ネグリチュードから群島的思考へ』（水声社、2020年）の付録となる「フランス語圏作家小事典」の作成についてお誘いくださったのは、2019年4月1日のことだった。何かにつけて引っ込み思案の私だが、「逃げてはいけないお仕事だ」と感じ、サハラ以南アフリカに出自があり、フランス語で書く作家の項を担当させていただくことになった。

その後のメールでのやり取りを読み返すと、先生はたいへんな情熱を「小事典」作成に注いでいらっしやうとあらためて感じる。何より思い出すのは、先生がサハラ以南アフリカの作家についてももちろん深い知識をお持ちだったということだ。アラン・マバンクは重要な作家なので、もっとしっかり解説を入れてください、というようなご指摘をくださったりしたのである。

先生がとくにこだわられたのは、作家の姓の扱いであった。「小事典」では作家名をカタカナ表記し、姓の方を五十音順に並べることになっていた。けれどたとえば「モンゴ・ベティ」や「ケン・ブグル」のように作家の出身国の言葉でペンネームがつくられている場合、姓というものがあると言えるのだろうか。いくつかの文献を比較して先生にお伝えするというやり取りが、少しのあいだ続いた。その結果については出版された実物に目を通していただきたいのだが、「小事典」の冒頭には、サハラ以南アフリカの作家の姓の扱いの難しさについてコメントが付されている。この本の刊行にあたっては、もっと多くの目を配るべき問題があったはずであるが、先生は私の考えを尊重してくださりつつ、発信する情報の正確さに厳重にこだわっておられたのだった。

後日、先生にお礼のメールをお出しすると、こんなお返事をくださった。「サハラ以南の作家については、日本では実態が全く知られていなかったと言ってよいとおもいます。それが今回の小事典で、初めてヴェールが取り去られた観があります」。私は自分の仕事の不十分さを承知しているので、赤面してしまった。けれど先生はこのとき、サハラ以南アフリカのフランス語で書く作家の文学について、もっと日本に知らしめるという構想をお持ちだったのでないだろうか。だから私には、頑張りなさいという励ましをくださったのだと思う。

同じ2019年9月にストラスブールで『プレザンス・アフリケーヌ』誌に関するシンポジウムが開催された。シンポジウムで発表をなさった先生はあいまのふとしたとき、参加した日本人に向かっておっしゃった。仕事の結果が出るには時間がかかるものだ、どんな仕事も引き受けてやっておいたらいいと。前に進んでいくとは、そういうことの繰り返しなのだと思つた。先生はそんな風に進んでこられたのだと思つた。



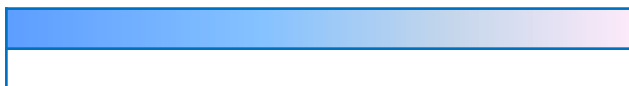
会員紹介

氏名 浅野千咲 Chisaki Asano

専門 ハイチ文学

所属 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程

ハイチの作家フランケチエンヌ（1936-）の作品を中心に、20世紀のハイチ文学を研究しています。現在はフランス語に触れることが多いですが（ハイチ・クレオール語も鋭意勉強中です）、修士課程ではケルト語派、特に現代ウェールズ語の非人形動詞について調べていました。フランス語圏文学に興味を持ったのは、たまたまフランケチエンヌの作品と出会ったことがきっかけでした。留学中だった時分、友人が日本から購入した本を代理で受け取り、盗み読みし、自分なりの転換が起こり、フランス語圏を認識する作業が始まり、この度本格的に研究に乗り出した、という成り行きです。本はちゃんと友人に渡しました。いつかケルトとカリブ海の関係も研究したいのですが、今はハイチ文学の研究に専念しています。最近ではフランケチエンヌの一つ前、1946年のハイチ社会の熱狂と深い関わりを持つ世代に遡り、20世紀中ごろのハイチ社会と文学とを照らし合わせながら考察しています。今冬からモンREAL大学に留学するため、ハイチを研究の軸に置きながら、ケベック文学、そしてフランス語圏文学を考えていきたいと思っています。よろしく願います。



日本フランス語圏文学研究会会報
第7号
2022年 11月14日刊

日本フランス語圏文学研究会

早稲田大学法学学術院
中村隆之研究室

(早稲田キャンパス8号館1020号室)

〒169-8050

東京都新宿区戸塚町1-104

HP:

<http://www.archipelsfrancophones.org/>

Mail:

miyakoo385@hotmail.com

編集後記

寄稿いただいた皆様、お読みくださった皆様、ありがとうございました。ささやかながら、立花先生のお仕事と各人の思い出という島々を少しずつ訪ねる、多島海の旅のような冊子になったかと思えます。一つ一つの文章が、背後に様々な風景の土地が広がる、港のように思えました。

私個人の思いとしては、ご病氣もコロナ禍もくぐり抜けて、読書会や学会などでまた直接お会いすることが叶わなかったのが、残念でなりません。感謝も、後悔も込めて、ご冥福をお祈りいたします。

立花先生が遺されたお仕事を基に、先生の思い出を胸に、研究会の活動は続きます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

(早川卓亜)



マルティニクにて（撮影：福島）

お知らせ

2023年3月2日（木）14:00-16:00、東大駒場キャンパスの18号館ホールにて、コートジヴオワールの作家ヴェロニク・タジョ氏の講演があります。邦訳のある『神（イマーナ）の影ルワンダへの旅—記憶・証言・物語』についての講演です。同作は1994年にルワンダで起きたジェノサイドを取り上げた作品です。3月4日（日）には京都で「タジョさんを囲む会」を催します。みなさまのご来場をお待ちしております。詳細は後日お知らせします。